

The Significance of Existence of Regional Museums: Activities and Prospects at Idojiri Archaeological Museum under COVID 19 Disasters

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Komatsu, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061623

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



特集：コロナ禍における博物館の実態と役割
地域博物館の存在意義 ～コロナ禍の井戸尻考古館～

小松 隆史
(井戸尻考古館館長)

はじめに

「出来ないことは出来ない。が、今だからこそやるべきことがある。これを一つの画期とするべきだ。」これが、私たち井戸尻考古館が出した結論である。

2020年2月に顕在化した新型コロナウイルスの感染拡大、その防止のため、まず当館の主催イベントである「井戸尻文化講座」を“無期限延期”することとした。そして感染の拡大に伴い、井戸尻考古館も臨時休館することを余儀なくされる。これは県のそして町の方針に基づくものであり、致し方ないものだった。井戸尻考古館は富士見町立の小さな地方の博物館だ。厳密に言えば博物館法に定められた博物館ですらない。しかし法とは関係なく、町の、地域の歴史を研究し、語り、伝える「地域博物館」であるという矜持があり、歴史がある。だからこそ、この“休館”という現実、私は鋭い刃を喉元に突き付けられたように感じた。「お前たちの存在意義とは何か。」という問いである。休館したまま何もしないでよいのなら、存在意義など無いものとみなされてしまうだろう。では開館していない地域博物館とは、どのような存在意義を持つのか。

1. コロナ禍の井戸尻考古館

(1) 臨時休館と休館中の活動

井戸尻考古館は長野県諏訪郡富士見町にある、町立の博物館である。「石の時代」である縄文時代に特化した博物館であり、それ以降の「鉄の時代」を物語る歴史民俗資料館が併設されている。ここには富士見町教育委員会生涯学習課文化財係が置かれ、町の文化財保護行政全般を担うとともに、博物館運営も同時に行っている。小さな町であっても二つの業務を兼務することは多忙であるが、埋蔵文化財の発掘調査や保護が、館の研究や展示に直結しているために、地道な業務や活動を、直ちに広く内外に発信できるという強みはあるだろう。

また当館は縄文王国とも称される八ヶ岳西南麓の名だたる縄文遺跡を発掘調査、研究を重ね、日本の縄文研究をリードしてきた施設でもある。それ故に井戸尻考古館の名は知っていても、それがどの自治体にあるかは知らない、という方も多い。施設の大きさの割に、知名度が高く、遠方からの来館者も多い施設である。

事は前述のように、主催イベントの“無期限延期”から始まった。この「井戸尻文化講座」は2004年から毎年2月末から3月上旬に開催され、2019年までに13回を重ねてきた。前段の「縄文講座」(1998年～)より数えると18回になる。年次と回数が合わないのは、外部講師を招いての記念講演会を開いた年や、諏訪大社の御柱祭の年には開催されないためである。館の職員やOB、井戸尻考古館に縁のある研究者が、無報酬で講師をつとめているにもかかわらず、町内外や県外、首都圏からも受講者を集め、町で最も集客力のある人気の講座となっている。“無期限延期”としていのは、実は今回をもって従来通りの講座はいったん終了とするという「最終回」予告をしていたため、ただ中止にして最終回が無くなることは、毎回楽しみにしてくださる方々に失礼だろうと考えたためであった。

そしてついに、3月4日(水)より、臨時休館が決定された。当初は3月17日(火)までの予定であったが、4月末まで、さらに5月末までと延長されることになる。当館は図書館や体育館など、町内の他の社会教育施設に比べて利用者の総数は少ない。しかし割合で見ると町外からの来訪者の比率が圧倒的に高い。特に感染者が急増していた地域からの来訪者が多いこともあって、周辺の博物館よりも早い段階での休館が決まった。

大勢のお客様が訪れるはずの春からゴールデンウィーク、初夏の休館は、入館者数において大きなダメージだが、何より地域の子供たちが歴史(特に縄文

時代)を学ぶタイミングにぶつかってしまったのが問題だった。例年ならば地元の小中学生が来館し、体験などを通じて地域の歴史を学ぶ、重要な時期である。学校が休校しているとはいえ、ただ休館しては地域博物館の役割を果たせない。引きこもってしまうのではなく、この期間に何を行うかが極めて大切な意味を持つと思われた。

私が言うまでもなく、博物館にはいくつかの役割がある。思うにそれは①資料の保存・管理 ②研究活動 ③普及・啓発 ④公開 などに大別できるだろう。その中で決して「臨時休館」できないものが一つあって、それが①の「資料の保存・管理」である。未来に伝えるべき貴重な文化遺産の保存は、止めることはできない。けれど単に保存するだけならば、それは「倉庫」でもよいことになってしまうだろう。実は②～④あってこそ、①なのであり、これらは切り離すことができないのである。

故にまず、町の大切な資料を預かるものとして、臨時休館中に何をなすべきかを考えた。最初に思いついたのは、いわゆる“インターネットミュージアム”。オンラインで収蔵品を公開し、解説するものだが、これは今に始まったことではなく、あちこちの博物館でこれまでも開かれていた。これならばさしたる労力もかけず、すぐに対応することが可能だった。しかしどうだろう。日頃から常設展示されている、あるいは図録などに掲載されている“メジャー”な収蔵品とその解説ならば、博物館に行けないことの代わりにはなっても、それ以上にはならない。実物を見ることができないという精神的な渴望を一時的に満足させることはできても、それ以上の楽しみにはつながらないのではないだろうか。

そこで井戸尻考古館では「電腦展示室」と称し、収蔵品の日頃みられない姿や解説、あるいは常設されていない資料を公開することにした。しかもこれは、臨時休館中のみの限定公開。様々な制約があつて日頃できない展示を、休館中に限って Web サイト上で公開することにより、普段の考古館では体験できない、特別な景色がみられるという点で好評を博した。面白いというだけではなく、館内の展示解説では踏み込めない、土器の出土状況やエピソードを写真付きで紹介することで、考古学研究者からも評価していただいた。

一般の方にとって面白い、楽しいものであると同時に、学術的な考察や学史への理解も深められる、意味のある企画であった。

このように井戸尻考古館では、コロナウイルス感染拡大防止のための対応策でありながら、単なる代案ではなく、新しい事業として打ち出していこうと考えることにしたのである。なおこの「電腦展示室」、臨時休館期間に限定しての開設を宣言していたため、現在は惜しまれつつも閉鎖しているが、地元テレビ局の目に留まり、夏から冬にかけて共同で番組を制作した。井戸尻考古館の活動を広く伝える良いきっかけになり、かつ新しい試み生まれることにつながった。

さらに、この期間中に町の歴史を年表にまとめて公開した。町の年表とはいっても町だけではなく、題して「世界史の中の日本史の中の富士見町の歴史」年表。横並びの3つの年表がリンクしており、町の歴史が日本の中で、あるいは世界の中で理解できるようにしたものである。さらにここに改訂版として「私たちの歴史」を加えて、「世界史の中の日本史の中の富士見町と私たちの歴史」年表とした。祖父母や父母、兄弟姉妹やペットの犬、近所の商店まで、歴史年表の中に書き込めるようにしたものであり、歴史を身近に感じてもらえることができる。これは学校での授業ができなくとも、あるいは授業が再開したのちにも役に立つように、富士見町生学クラブ(町の生涯学習課で開いた Web サイト)に残すとともに、印刷したものを小中学校にも配布した。

年表は幅 60cm、長さ 2m の非常に大きなものとなったが、町の出来事は、相対的に少ない。そこでこの年表には、意識的に伝染病の歴史や災害の記録を細かく記載することにした。それはこの地に生きていた私たちの先祖が、先輩たちが、どのように苦難の歴史を克服し、乗り越えてこの町を築いてきたのかを知るためでもある。そして私たちはこの年表を作成することにより、学校に通えず友達とも遊べなくなった子どもたち、様々な社会活動が制約された大人たちへのメッセージを込めた。「今この時、私たちは悠久の歴史の1ページを紡いでいるのです。だからその歩みを未来に遺し、伝えなくてはいけないのです。決して雑に生きないでください。遙か未来を必死に生きる人たちが、私たちから学べるように。」と。

（２）観覧の再開 ～その対策と工夫～

世情に従い、2020年6月2日より観覧が再開されることになった。このころ、周辺の博物館・美術館も相次いで再開に踏み切ることになった。どの施設も感染防止対策に十分に気を使いながら、手探りのようなものだったと思うが、私は館のスタッフと打ち合わせ、一つの約束をした。それはお客様に必要以上の緊張を強いけないこと。この状況下、どこへ行っても「アレはいけない」「コレはこうしてください」など、制限ばかりになる。そのようにお客様を迎えるのはこちらも苦しい。けれど、やるべきことは徹底しなくてはならない…。そこでWebなどで発信する来館者へのお願いや、館外での掲示物では厳しい表現を用いるが、館内での対応はそれを感じさせないものにするという約束である。

館内掲示物の表現を柔らかくすることはもちろん、入り口の掲示の冒頭にも次のようなメッセージを掲げた。

ようこそ！“おらあとう”の井戸尻考古館へ

“おらあとう”というのは、当地の言葉で「俺たちの」という意味です。

新しい生活様式の中で、新しい井戸尻考古館の楽しみ方を見つけたい。

私たち職員一同は、最大限の努力をいたしますが、井戸尻にお越しいただく皆さまも“おらあとう”の考古館として

工夫しながらこの状況を乗り越えていただきたいと思います！

さらに館内のお願いを“展示の一部”とすることを考えた。それが例えば「ソーシャルディスタンスの槍」であり「学芸員の眼」。人との距離を保つために、展示品として復元した2mの石槍を用いる「ソーシャルディスタンスの槍」は、ネットやテレビの情報番組でも取り上げられて話題になった。槍の先には、あえて本物の黒曜石で制作した尖頭器を装着し、「縄文時代と槍」という展示解説を加えている。井戸尻考古館には、数多くの復元した道具が展示されているが、これらと同様に“復元展示品”という位置づけとすることで、槍について学ぶと同時に、これを持つ来館者への注意を促し、危険の生じないように工夫したもので

ある。

「学芸員の眼」は陳列棚の中に、ある種の土器をテーマにした小パネルを、間隔を置いて配置し、それを読むことで自然と隣の人との距離がとれるように工夫したものの。しかもこれを最後までたどると、その種の土器（有孔鏝付土器）の変遷や用途に関することなどが理解できるという仕掛けとなっている。

これらはコロナ対策ではあるが、あくまでも井戸尻考古館の展示である。とりわけ「学芸員の眼」は、言われなければ、それとは気づかないだろう。埋蔵文化財・考古資料を公開する工夫として、コロナ対策を“利用する”ことにしたのである。

2. 挑戦すべきこと

対策を取りながら、様々な工夫も凝らしながら観覧は再開したものの、井戸尻考古館の“売り”の一つである館長・学芸員による展示解説は11月まで再開できずにいた。やはり人が密集することが大きな問題であったが、現在は条件付きで再開している。人数制限、時間制限をしながらではあるが、再開するとそれを待っていたかのように予約も増え、少人数ながらツアー客などの受け入れもできるようになった。

展示解説はもちろんだが、それにもましてイベントや講座が開けないことは、私たちの仕事や研究について伝える機会を失うことになる。またイベントを楽しむにしてくださる関係者や地域の方々も元気をなくしてしまう。これでは地域博物館の役割を果たせない。これが次の課題となった。とりわけ問題なのは毎年10月に開催する「高原の縄文王国収穫祭」。19年目となり、すっかり地域のお祭りとして定着する一方で、全国からファンが集まるイベントに成長している。町内外に井戸尻考古館の魅力を発信する最大のイベントの開催が危ぶまれていた。実行委員会が開かれ、結局、祭りは中止と決定。けれどそれだから「ハイ、やりません。」というのではあまりにもつまらない。実は夏頃には「出来ないだろう」という予測は立っていたが「だからこそ、やるべきことがある、できることがあるのではないか。」と考えていた。

実はこの収穫祭には、各地で行われている「縄文祭り」や「収穫祭」とは、まったく異なる点の一つある。それは井戸尻考古館の研究を基礎に考え、当時の祭り

を再現している「縄文の祭式」の存在である。それは、「今年の収穫に感謝し、新しい年の実りと安寧を祈る」いわば“神事”のようなもので、イベントの核、あるいは魂とでもいふべきものである。収穫に感謝したのち、豊穰の女神像である土偶を“殺害”、祈りの舞を奉納するというものだが、大勢の観客や祭りの参加者がいなくても、井戸尻考古館としては、これは行うべきものだと思われたのである。「無観客でもやろう。」「これだけは何としてもやらなくてはいけない。」と。

できないことは仕方がないが、それでも決してあきらめないという我々の決意が伝えられるのではないか。そして同時に、私たちの「高原の縄文王国収穫祭」は、単なるイベントではない、自然に対する感謝と祈りの祭りなのだ、という、井戸尻考古館らしい、あるいは富士見町らしい強いメッセージを発信できるのではないか、と思われた。実行委員会でこの意見が受け入れられ、地元の太鼓チームがそれに賛同し、当日参加してくれることになった。町でもこの考えに理解を示し、事業内での予算流用が認められたため、オンラインでの配信まで行うことができた。

当日、夜は4度。それでも「井戸尻考古館は、富士見町はやるんだ！」というメッセージを伝えることができたと思う。ぜひ動画サイトにアップされた映像をご覧いただきたい。収穫の祭というのは喜びであると同時に、やがて訪れる厳しい冬に臨む覚悟を決める時でもある。そんな覚悟を感じていただけたら、と思う。

3. できなかったこと

試みながらできなかったこともある。それは「コロナ禍を記録すること」。地域博物館であれば、その地域の歴史を物語る資料を収集し、研究・保存すべきである。当然、今回の様々な出来事は、博物館として記録すべき歴史の1ページである。公文書は別途保存されるとして、私が求めたのは、例えば商店の「臨時休業」や「テイクアウト始めました」のようなポスターや手書きポップ、消毒瓶や手作りマスクなどである。個人や町の商工会にも働きかけたが、どの店舗も商工会も、様々な対応に追われる厳しい現実の中では、ほとんど収集することができなかった。6月からの観覧再開が決まった5月下旬からのアクションでは、私たちの対

策準備にも手間取り、機会を逃した感じもある。このようなことは、災害の後にもかならず起こる。的確に資料を収集して保存するためには、そのタイミングと熱意、そして住民の思いに寄り添う心が重要になる。

私は本稿を「井戸尻考古館館長」の立場で執筆しているが、「富士見町歴史民俗資料館館長」でもある。金沢大学考古学研究室紀要の原稿からすれば、考古学からは離れた問題ではあるが、悔悟の意味を込めてここに記しておきたい。

おわりに

私たちは今回の状況を二つの視点でとらえることにしている。まず「安全・安心のため、出来ないことは出来ない。勇気をもって、中止の判断をすること。」これは来館者や館職員の安全のため、社会にこれ以上の感染拡大を引き起こさないための社会的な責任であり、行政として当然のことである。

そしてもう一つ。「これまでに行ってきたこと、変えたくても変えられなかったこと、出来なかったことを実現する好機でもある。」ということ。これまで続けてきたことが強制的に断ち切られた、それは衝撃的な出来事であり、かつ辛い事でもある。場合によってはそれによって、今後なくなってしまう物事もあるかもしれない。けれどそれは同時に新しい流れを生むことになり、劇的な変化をもたらすこともあるだろう。これまでになかった方法で、埋蔵文化財保護も史跡の活用も、研究や普及活動もできるようになるのではないだろうか。また館の職員や文化財担当者だけがやるのではなく、地域の人々と連携することで、その地域の内外に、より強いメッセージを発信することも可能になる。それこそが、地域博物館の存在意義を証明することになるのではないかと。

話はコロナから離れてしまうが、私が井戸尻考古館に奉職してから、しばしば「地域博物館の存在意義とは何か。」という刃を向けられてきた。阪神淡路大震災や中越地震、そして東日本大震災。とりわけ身近に被害があった令和元年東日本台風（台風19号）災害では、復旧ボランティアに参加し、守れなかった民俗資料をこの手で廃棄もした。文化財の保護や埋蔵文化財保護行政の在り方はもちろん、非常時の博物館運営などについても考える機会が多かった。

コロナウイルスの感染拡大は、一度に多くの命や文化遺産を奪ってしまうような自然災害ではない。だが確実に、博物館運営の在り方や文化財保護の考え方を変えるのではないかと、その意味で非常に大きな出来事ではないかと思う。地域経済の低迷による町財政状況の悪化が深刻化し、学校教育や生涯学習事業全体への影響は避けられないだろう。このような状況下で博物館活動などは、どちらかと言えば“不要不急”なものに分類されがちである。だからこそ、ここでしっかりした存在意義を示さなければならない。

地域の文化財を守り、歴史や文化を研究して未来に伝えるという視点に立てば、地域博物館の役割とは、歴史や文化にとっての“地域医療”にも等しいと思う。この期間中いくつかの試みを通じて、できないことはあったが、これまで以上に伝えられた部分も多かった。また同時に、手応えも感じている。

コロナ禍は続いている。答えは出ていないが、今だからこそできること、今こそやっておかなければならないことを、このタイミングを好機ととらえ積極的に進めたい。歴史の1ページとして刻まれる今この時をひとつの画期として、私たちがどう動いたのか、しっかり未来に伝える必要があると思っている。地域博物館として、まさにその姿勢と覚悟が問われているのではないだろうか。